

寺報 善 巧

発行
☎ 938-0862 富 山 県
下新川郡宇奈月町浦山497
白 雪 山 善 巧 寺
TEL (0765) 65-0055
FAX (0765) 65-0975

寺
こよみ

一 月

一日 修正会

三日 日校かるた会

六 日 栗虫報恩講

七 日

一〇日 成人式

一日 花の会初寄合

一日 御正忌用米とき

一二日 御正忌準備お華束

一三日 一時 御正忌速夜

一四日 一時 速夜

一五 日 十一時 下村講

一時 速夜

夜七時半初夜

一六 日 十一時浦山・析屋・

熊野・大橋講

一時 満座

布教 泉南市安楽寺

佐々木徹生師



寄進された打敷・楽太鼓・大さん（右端）

今年もよろしく

善 巧 寺

法輪寺

昭行寺

親鸞聖人は他力真宗の教えを横超のおしえとしめされました。横超とは、阿弥陀如来の本願力によつて横ざまに生死の大海を超え、すみやかに浄土のさとりにいたるといふみ教えです。城端町出身の横道善蔵さんは、ながく大阪や西宮で浴場を営む有難い念仏者でした。ある時、「あんたの名前は横道という変な名前ですな。でも仏法に遇えて人生の横道にはいらずよかつたですね」というと、「わたしの横道はそんなつまらぬ名前ではない。横超の直道をあらわす尊い名前じゃ。ついでにいうが善蔵の名も善をつめば金の蔵がたつたという俗っぽい意味ではないぞ。私のいのちは、如来さまからいただいた南無阿弥陀仏の善根功德がおさまつて（蔵）いるという意味じゃ。」

教行信証をくりかえし読まれた人だけあつて味わい

横 超 の お し え

がふるっています。スイスのプザンソンさんは仏蔵を彫刻する真宗僧侶です。彼はいう。

「フランス革命以後、ヨーロッパではだんだん宗教が弱まつていつて、現在の若い人は、どこに自分の思想、

自分の精神の依りどころを探してよいか模索している状態なんです。私もそんな状態の中でいろんな宗教を見て今のヨーロッパに一番適した宗教として見出したのが浄土真宗です。今のヨーロッパ全体がその状態に適した教義を「横超」の中に見出すことができます。」

二十一世紀は親鸞聖人のみ教えがヨーロッパにひろまる気配がたしかに感じられます。本家の日本人私どもこそ一層誇りを持って聞法につとめ味わいをふかめたく思います。

行信教授

高田慈昭先生



空華忌講話

行信教教授

山本 攝先生



まじき事

赤尾の道宗という方の「心得二十一箇条」というご文がございます。これは、厳密には御聖教ではないのですが、先哲の中には、この二十一箇条の講義録をつくられた方もいらっしゃいます。御聖教に準ずるものとして私たちも味わっていいのではないかと思ひまして、このお言葉をいくつかご紹介いたしまして今回のご法要にあわせていただくと思つて参つたこととでございます。

「後生の一大事、いのちのあらんかぎり、油断ある

いろんな妙好人と呼ばれた方がいらっしゃいますけれども、妙好人と呼ばれた方も決して、一つの個性に凝り固まつた方ではないのです。それぞれ、その人その人で豊かな自分の個性というものを持っていられらるんですね。典型的な妙好人と呼ばれた方、例えば浅原才市さん。どうも

あの方は、どちらかというとと無口で、内向的と言つていいのかわかりませんけれども、比較的自分自身の御安心の喜びを自分一人が味わつていかれた、そういうタイプの方であつたと思うのですが。ただ、ある書物を読ませてもらつて私も浅原さんのイメージを少し変

えているんです。才市さんという方は、生涯下駄職人で貧乏な一生を送られたという風なイメージが世間一般に広まつておりまして、私もそういうイメージを持つておつたのですけれども、本当のところはそうじゃなかつたようですね。というのは、才市さんに非常に近い涅槃寺というお寺の住職さんが今から八年前に書かれた本をつい最近読んでみたのですけれども、そんなに貧乏で、ひたすら下駄職人として一生を送つていかれたというのではなかつたようです。当時才市さん

か税金を払う必要がなかつたんですね。だから千六百人ぐらいの方の中で納税をしておられる方は二百人ぐらいだったそうなんです。その中で才市さんは上から数えて七十番目ぐらいの納税者だったらしいんですよ。そういう事実を調べたのを読ませてもらいますと、貧乏なイメージの才市さんはどうも嘘のようです。才市さんのお父さんは西教という方。この方は涅槃寺というお寺のお手伝いをしてらっしゃったんです。この西教という方はちよつと言葉悪いですが、乞食

後生の一大事、いのちのあらんかぎり、油断あるまじき事

が住んでいらつしやつた大浜村は、だいたい人口が千九百人程の方がいらつしやつたんです。

あの当時は今と税金を払う制度が全然違ひまして、ある程度の収入のある人し

坊主みたいな格好でウロウロしていて世間からちよつと見下げられておつた、というイメージも定着しているようですけれども、これもちよつと誤りみたいですね。この当時、お寺のお手

伝いをされる方というのは、時にはご住職のかわりをされるぐらいの立派な地位の方でいらつしやつたんです。ただし、着られるものとかは昔のことですから住職さんが着られたものを、もう一回仕立て直して、身につけていられるそうですから、そんな立派なお装束を身につけていらつしやつたということとはなかつたようです。そんなところから誤解されたいようですけれども、決して才市さんのコンプレックスになるような、そういう立場の人ではなかつたようです。才市さんのご信心のことを教えてくださったのも、どうもお父さんのようです。この方が才市さんを育てられたんですね。そういうことを読みますと、妙好人と呼ばれる方は、キチツと伝記が残つてないものですから、特に才市さんにしても生前にそれほど有名になられた方ではありませんが、随分とそのへんのイメージが間違つて伝え

られてきたところがあったようです。実際に才市さんはお聴聞はじめられてからも、なかなか浄土真宗のご安心はわからないことの連続だったようです。これは皆さんね、どの妙好人でも共通して言えることは、お寺参りされるようになって、すぐにご安心を喜んでそして有り難い念仏者になっていかれたということは、まずないです。どんな方でも五年十年と長い歳月をかけていかれるんですね。足利源左さんという妙好人もそうなんです。源左さんという方は十八歳の頃にお父さんが急死なさるんです。その亡くなられる時にお父さんは源左さんにどう言われたか。もう自分の死を覚悟なされたんでしょね。

では人の一生を支配するような言葉になっていくんです。このへんが言葉の有り難いところで、言葉というのは場合によっては人を傷つけることがあります。というか、ほとんどが人を傷つけているのかもしれない。でも、時によっては、その言葉がその人の一生を決定づけるような言葉にもなってくるんですね。源左さんのお父さんは死ぬ間際に「自分が死んだら親様をたのみにせえよ」という言葉を残して亡くなっていた。ところがその源左さん、その言葉を聞いたのが十八歳の頃。一年経って十九歳の頃からお寺参りを始められるんですけれども、なかなか一朝一夕でわかるもんじゃなかった。「親様についていたいなんやろうか」「たのみにするってどうすることだろうか」それがどうしてもわからなかったんです。そして毎日毎日、法座のあるところへ必ずお聴聞に出かけるんですけれども、「わからんわからんわからん」の連続だったんです。ようやくなんとなく、「なるほどこういうことだったのか」ということがわかってきたのがお聴聞はじめて十年くらい、だいたい三十



山本先生と出勤の行信教校OBと学生

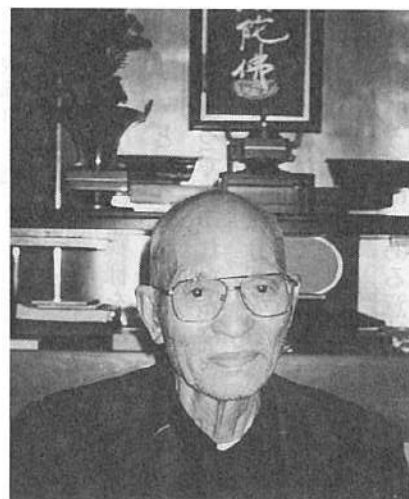
歳の頃だったと源左さんの述懐にあるんです。あれは有名な、山へ芝刈りに行って牛に荷物を背負わせてわかった、というのがだいたいい三十歳頃だったというのです。だから源左さんにし

てもそれほど長いお聴聞の結果、しかしいつの時点ではつきりわかったという、そういうことじゃないんですよ。「なるほどこういうことだったんだろうかなあ」とうなづく、あるいはうなづかざるをえないような味わいというものが自分の身に染み込んできたのが、やっぱりお聴聞をして十年ほど経ってからということ。皆様方も、若い方も、あまり焦らなくていいですね。聞いてもわからんのはあたりまえなんです。むしろ、自分の健康・体力に自信があつて、なにもかもあつて、そんな時にすぐにわかるというのはむしろおかしいと思うんです。もちろん皆さんお一人お一人は、いろんな苦難の人生を歩んでこられたと思うんです。私たちはお互いよそ行きの顔をしてここに座ってますけれども、家へ帰ってない問題をかかえてないっていう人はどこにもいらっしやらない、むしろ歳を取って

くればくるほど。若いときは前途洋々としてますからね、少々の苦勞はなんでもないのですけれども、歳をとってくるほど苦勞ごとというのは増えてきますよね。そんな中で、なるほど私は浄土真宗のお念仏のことを聞いてきて、今までなんとか理屈で考えようと思ってきたけれども、結局これは理屈でつかむ世界じゃなかったんだ。むしろ理屈でつかんだ世界というのはまた理屈で崩れていく世界じゃないか。自分の人生のいろんな経験の上で、一つ一つ一歩一歩前進してきたなかで、なるほどやっぱりこれは如来さまの仰せだけが真実だったんだ、というふうな大きな感情といいますか、そういう思いが必ずお聴聞をしておれば私の上に染みついてくる時がくると思うんです。だからそこをところをね、一朝一夕にあせつてあれこれとすることはないと思うんです。

次代へ綴るメッセージ

永年善巧寺
総代として住職を助け、お寺と門信徒の橋渡し役をつとめて下さった重鎮鬼原勝次さんがこの度勇退されることになりました。鬼原さんの数々の名言は広く宗門にも知られるところですが、ここに、後に生まれんひとへのメッセージを綴ってもらいました。



総代 四十年の 思い出

浦山新
鬼原 勝次

に一生を送られるとか、その生活を支えたのは在家信者達でした。

今の日本の仏教、殊に我が浄土真宗では阿弥陀様を信じ、僧俗共に信の世界に

来ます。

今は亡くなりましたが、魚津の総代に、谷口さんという方がおられました。私も親しくさせて頂きましたが、或る時「学もなく信も

心揺さぶられた先輩総代のことば

― せめてお寺の行事には

欠かすことがないようにしたい ―

至ることを念じております。そのため僧侶には、阿弥陀様のお言葉を誤りなく伝えて下さる大きな使命が御座います。門信徒者はこの僧侶の活動拠点である寺を護持する義務があると信じます。

戦後の荒廃したお寺の環境を整備することこそ私達

お寺の環境を整備することこそ

わたしたち門徒のつとめ

解を経て決心した次第です。仏法発生の地、古代印度では、僧侶の集団を「サンガ」と呼び、専ら自己修行

門徒の務めと思って参りました。数回の大修理も一応の成果を見ました今は、私は心おきなく退くことが出

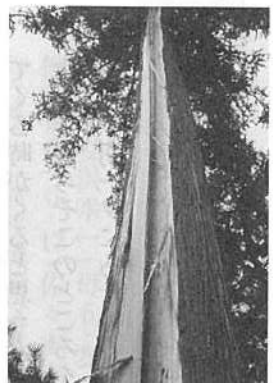
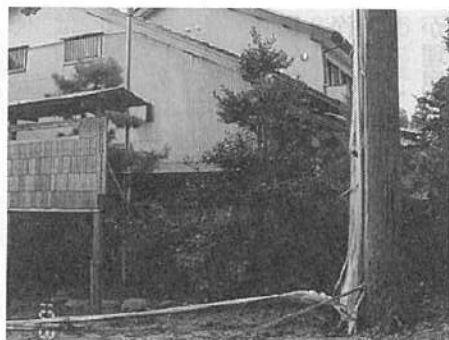
今後も足の

およぶかぎり

私はこの方の行動と信念に大きな衝撃を受けました。せめて及ばずながらその足跡を踏ませていただきたいと念じております。今後足も及ぶ限りお詣りをさせて頂きたいと念じております。

さようならヒマラヤ杉

さる十月二十九日未明、境内の樹木に激しい落雷。長年境内の入口に門番の如く立っていましたが、ごらんの様な有様でいたし方なく、翌日明けののを待ってすぐ伐採しました。この他にも火災報知設備受信盤や電話機などが被害を受けました。この時の雷は広く富山県下全体に被害を及ぼしたようです。





交替にあたり

浦山 澤田 最一

もう一人、十八年間総代を続けられた澤田最一さんが勇退されます。澤田さんは十八年前、総代を引受けられる時、地区の門徒さんを一軒一軒訪れ了解を得られたとか。八十才を越えられてからも、住職継職奉告法要の建設部長として献身的に責務を全うされました。長い年月お寺に通い聴聞し、見守ってくださる総代さんの大切さをつくづく知らされることであります。

半世紀以上もの昔、まだ二十歳前、県下一北陸一の足軽足早と言われ、自分ながら自信を持った時期もあり、登山も毎年のように。立山、白馬朝日へ何度も、富士山までも（昭和十八年）。頂上に立つて雲海を見下ろした時の素晴らしさ、感動。また忘れられんもんで…。こうして身軽に動けた時もあつたんですが、今や七回目の辰年を迎え、老境の域に入り、自慢の足も腐って体はガタガタ。入院、手術、通院治療、点滴、注射と頻繁。

お寺の手伝い、役もこれまで…と、長老鬼原さんと相前後して、いい人に替わってもらい退くことにしました。ろくな手伝いもしないまま十七、八年お寺の仲間さん達と親しく交わらせて頂き本当にありがとうございました。まだ若い？が、予想期以上の年まで生かしていただき、ただ感謝感謝。今後のわが寺、善巧寺の護持発展の為に、皆さんが一層強力な支援盛り立てを続けられるであらうことを念じ期待いたします。

駄筆、拙筆。

今年も報恩講、空華忌と大切な法要を滞りなくお勤めすることができました。もち米、大根、里芋をとどけて下さった方々。清掃、準備、後片付けをして下さった総代さんやお世話方等々。ありがとうございました。



▲山本徹先生と▼



▼おつかれさまでした



あたらしき世紀めぐりてけさの春
迎春やみあかりのもと おろがむる

喜子

寺
ごよみ

二月

一日 浦山講

二日 三日市報恩講

五日 生地・荻生報恩講

九日 下立講・音次助成会

一〇日 お経会

一六日 下立報恩講

一七日 舟見報恩講

一八日 入善八幡・泊報恩講

一九日 柝屋熊野報恩講

二〇日 第三回カラオケ

二二日

二四日

二七日

寺
ごよみ

三月

一日 浦山講

二日 浦山報恩講

一〇日 黒西組仏教婦人会

一二日 連盟総会

一六日 柝沢講

二〇日 教化推進協議会

二五日 雪ん子劇団春の定期公演

新しい時代

行信教学校長 利井明弘

学僧として名高い曾祖父の鮮妙の兄、明朗は弟とひと味違つて政僧であつたようで、その一代の間に、二度ご本山の執行長を仰せつかつてもいる。その明朗の語録に、勝山善護師が聞き残された話が載せられている。

この明朗の話相手の品川さんというのは、維新に活躍した長州藩の志士で、維新後の新政府の内務大臣になつた人でもある。この明朗と品川さんのつき合ひは、とんでも無い事件が発端なのである。新撰組の池田屋襲撃事件に多くの志士を失つた長州藩は、これに憤激して、続いて「禁門の変」と呼ばれる戦いを新撰組や会津藩を相手に京都にくりひろげる。この戦いは、長州の負け戦になるのであるが、この敗残兵の中に品川

さんもおられたのである。

その時、蛤御門の警備に明朗も参加していて、逃げ遅れた品川さんを、何と、ご本山の中に匿つたのである。まさか新撰組も自分たちが借りていたご本山の太鼓樓の同じ敷地の中に長州の敗残兵が匿われているとは思つてもいなかっただろう。これがご縁で明朗と品川さんの交際が明治以後も続いたのである。

これにまつわるエピソードだけでも、本稿の何倍も書かねばならないが、今は本題ではないので、早速、勝山善護師の聞き書きを披露しよう。

……品川さん（弥二郎氏）が、日本も維新以来何事も進歩したが、特に進歩したのは医者と軍人である。なぜこの二つは他の方より余計に進歩したかと云えば、

これは生命に関することじや。命がけになつてかからねばならぬ、といわれた。……たつたこれだけの話であるが、考えさせられることは多くある。

娑婆は今、西暦二〇〇〇年を目前にしている。これを読まれる時は、もう新しい年を迎えているかも知れない。世間では時代が進むと共に、科学文明はますます進歩し、人々が仕合わせになるような錯覚におちいつているようだが、果たしてそうであらうか。

維新以来、品川さんの言葉通り、医学の進歩は目覚ましい。心臓移植や生命維持装置など、明治時代の人が聞いたら卒倒するかもしれない。又、日本は戦争を放棄しているが、世界のあちこちで、熱い戦いは止まるところを知らない。軍隊の究極の兵器が核兵器だとすると、一体これが進歩なのだろうか。

明朗の語録には、品川さんの言葉しかなく、明朗の

言葉はない。その時、明朗は何を語つたのであろう。勝山善護師はあまりに明白な言葉だから、書かれなかつたに違いない。

蛇足ではあるが、明朗はもつと命がけにならねばならないことがある、そう云つたに違いないのである。

仏教は、末法思想を説く。時代が進めば進むほど五濁悪世になるのである。

釈迦如来がくれましたして二千年年になりました。正像の二時はおほりにき如来の遺弟悲泣せよ

悲泣する我々に念仏がある。新しい世紀を迎えて、今こそ、私の後生の一大事を、命がけで聴聞しなければならぬ。『大経』には「世人不急の事を争う」とある。（「二味」冬の号より）



(12・9) 谷口豊作(12・30)
五十回忌 (昭和二十六年往生)

橘清治(三男1・9) 佐々木舟義(1・14) 藤沢義治(1・27) 山本清吉(妻2・7) 西中力次郎(二男2・8) 佐々木舟義(二男2・9) 佐々木時雄(二男2・13) 谷口太郎(二男3・23) 福沢紋平(妻2・25) 板川啓治(3・1) 大島己之助(3・2) 川内千右エ門(妻3・2) 大浦憲次郎(3・4) 佐々木貞一(3・5) 谷口健次郎(二男4・1) 開沢庄造(母4・2) 大浦吉次郎(4・12) 岡田己之作(4・20) 丸田稲夫(長男5・2) 佐々木光治(二男5・9) 川内勘右エ門(5・15) 上坂林太郎(妻6・22) 沢田貞次郎(6・25) 大藪森吉(五女7・6) 浦田甚作(母7・16) 中村久作(父7・16) 有馬猪之次郎(六女7・20) 鬼原勇作(二男7・25) 佐々木平太郎(7・31) 佐々木仁作(母8・13) 佐々木貞次郎(9・4) 浦滝鉄太郎(妻9・22) 佐々木甚八(妻10・10) 佐々木伊四次郎(三男10・16) 佐々木貞治(長男10・21) 佐々木八十八(妻11・20) 東狐政次郎(11・24) 谷口義一(二男11・17) 佐藤宗作(長女12・26) 野崎金造(長女12・27) 板谷正一(長女12・29)

御正忌 報恩講

一月十三日 昼一時 速夜

十四日 昼一時 速夜

十五日 十一時 下村講

昼一時 速夜

七時半 初夜

十六日 十一時 浦山・栃屋・

熊野・大橋講

昼一時 満座

布教

泉南市安楽寺 佐々木徹生師

御正忌報恩講は親鸞聖人の祥月法要です。
聖人の遺徳を偲びご恩報謝いたしましょう。

第三回カラオケ

あなたもどうぞ



時 二月二十七日 正午

所 門徒会館ホール

会費(飲物・おつまみ代)

男 千円・女 五百円

申込み 地区総代さんへ

しめ切り 二月二十五日

善巧寺仏教婦人会

新しい幕明け

第一期役員は

下村・大橋・栃屋・熊野お講

平成十年七月十八日を含め三回の会合、平成十年四月号から四回にわたる寺報掲載、各お講などでお知らせしてきた新規善巧寺仏婦会、いよいよ二〇〇〇年を機に新しくスタートします。皆さんの力で盛りたててください。本當の信仰を持てば、オウム、法の華、ライフスペースなどあやしげなものを見抜く目は育つはず。ご先祖が守ってこられた浄土真宗をしつかりと見直しましょう。

◎各お講の時に年会費五百円を集めて下さいます
ようおねがいいたします。

雪ん子劇団 春の定期公演

三月二十五日

午後四時

お寺座1

入場無料

九人の卒業生の最後の舞台。温かい心と拍手で送ってやって下さい。



合 掌

○玉雪院俊之師の大谷納骨
○雪ん子二十年シニア五周年
○教隆インドへ
○有花行信仏教学院入学
○法輪寺 長女南美ちゃん誕生、若院康彦さん活動スタート、庫裏新築
○落雷でヒマラヤ杉伐採
比較的年々穏やかな一年でした。さて世の中騒然として迎えた二〇〇〇年ですが、今日一日を生かされて生きる喜びを味わい、まことのおみのりの道を歩ませていただきます。

◆◆◆◆◆

宗教の名のもとに営利をむさぼり詐欺をはたらきわけのわからぬ理屈を並べる団体、教祖。宗教不毛の時代という人もいるようすがそうでしょうか。ほんものを知ればにせものはすぐわかるのでは？ 真のみ教えを聞く耳をもちたいですね。今年もどうぞよろしく。

